特定非営利活動法人

こどもNPO

年次報告書

こども×おとな＝未来

２０１４年度版

特定非営利活動法人こどもＮＰＯ

巻頭言

年次報告書の発行に際しまして、ご挨拶申し上げます。

こども NPO が、名古屋市緑区にピンポンハウスという子どもの社会参画実現のための施設を２００３年春にオープンし、１２年が経過しました。また、こども NPO が培った実践の更なる普及の場として２００８年４月から名古屋市緑児童館、２０１２年４月に中川児童館の指定管理者となり、各地域の子どもたちの健全育成等を通じて、子どもの社会参画の実現をめざしてきました。これらの活動は、会員の皆さま、地域の方々、ボランティアの皆さま、その他支援をいただいている多くの方々のお力添えの賜物であり、感謝に堪えません。このたび、その記録として年次報告書を作成いたしましたのでご覧いただければ幸いです。

今後につきましても、子どもの生きる権利・育つ権利・守られる権利・参加する権利を基盤として、子どもが社会参画する場や機会をつくり、子どもとおとなが共に持続可能な社会を実現できるよう活動してまいります。皆さまのご支援・ご鞭撻を賜りながら、こども NPO スタッフ共々引き続き頑張っていきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

２０１５年９月１日
特定非営利活動法人こども NPO
理事長　　石　原　信　行

こどもＮＰＯのミッション

子どもの生きる権利・育つ権利・守られる権利・参加する権利を基盤とし、子どもが社会参画する場や機会をつくり、子どもとおとなが共に持続可能な社会を実現することを目指す。

こどもＮＰＯは、国連「子どもの権利条約」に謳われている子どもの権利を基盤としている。生きる権利、育つ権利、守られる権利の保障はもちろんのこと、参加する権利の保障を通じて、子どもが社会参画することは権利なのだという意識を社会に根付かせていきたいと考える。現在の日本社会において、子どもたちが社会に参画する場や機会は十分とは言えない。子どもたちに関係のあることを決める時でさえ、おとなが子どもたちの声を十分に聴いているわけではない。しかし、子どもたちの持つ力が社会の中で発揮される機会を増やすことで、子どもとおとながパートナーとなり、共に持続可能な社会を形成していくことができるのである。

こどもＮＰＯの組織と事業

総会

理事会

事務局

（会計・人事・労務・庶務）

- 子どもの社会参画事業部門
- 子育ち・子育て支援事業部門
- 子どもの最善の利益を保障する事業部門
- 人材育成事業部門
- 調査研究及び政策提言事業部門
- 広報・啓発事業部門

子どもの社会参画事業部門

- 子どもの権利条約学習会 ⇒P7
- 子どもの参画促進研修～児童館・子どもの遊び場における子どもの参画～ ⇒P7
- ちいさなちいさな地球の学校 ⇒P8
- こどもアート☆コミュニケーション ⇒P8
- エンジョイ！のらキッズ☆オーガニック田んぼ！ ⇒P9
- ちびっこ親子のたまり場 ⇒P9-10
- 子どもの権利条約フォーラム 2014 in 東京への参加 ⇒P10
- Teens' Café ⇒P11
- にっしん子ども防災マップ探検隊 ⇒P11
- 学校に行かない，行けない子どもの居場所づくり事業 LARGO ⇒P12
- 大清水居場所づくり事業　子どもとつくるくらし☆あそび☆まなびの場 Roots ⇒P12
- 緑区子育て支援ネットワーク連絡会　子どもが育つ地域のつながりづくり事業 ⇒P13
- 子どものまちサミット企画委員会　なごや☆子ども City2014（実行委員会に参加） ⇒P13
- 名古屋市緑児童館 ⇒P14
- 名古屋市中川児童館 ⇒P14

子育ち・子育て支援事業部門

- なごやつどいの広場ピンポンハウス ⇒P17
- 預かり保育ふたば ⇒P17
- 一時預かりぴぽちゃんち ⇒P17

子どもの最善の利益を保障する事業部門

- 名古屋市生活保護世帯の子どもの学習サポートモデル事業 ⇒P15
- 名古屋市ひとり親家庭の子どもへの学習サポートモデル事業 ⇒P15

人材育成事業部門

- 名古屋市職員ＮＰＯ派遣研修 ⇒P17

調査研究及び政策提言事業部門

- こどもＮＰＯ学び場づくり×ＮＩＥＤ平和を創りだす学校づくりプロジェクト ⇒P16
- ＥＳＤ２０１４に向けての意見交換会への参加 ⇒P16
- ＩＳＰＣＡＮ子どもの虐待防止世界会議ユースフォーラム（実行委員会に参加） ⇒P6, 16

広報・啓発事業部門

- 緑区子育て支援ネットワーク連絡会「みどり赤ちゃんまつり０，１，２」（実行委員会に参加）⇒P17
- facebook，ウェブサイト，ブログ，機関紙等による広報活動 ⇒P17

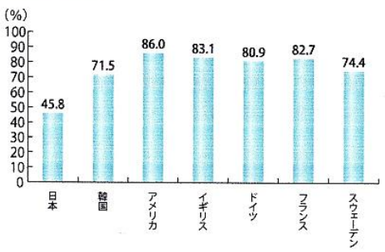
なぜ、いま、子どもの社会参画なのか？

こども NPO は子どもの権利条約に謳われている子どもの「生きる権利」「育つ権利」「守られる権利」「参加する権利」を基盤とし、子どもたちと持続可能な社会をつくるための活動を行う。その中でも「参加する権利」を子どもたちが行使することは非常に重要である。今の日本の現状を打破するために子ども自身の力は不可欠であり、私たちは子どもにはその力が十分にあると確信している。

なぜ、子どもの参画が必要か？

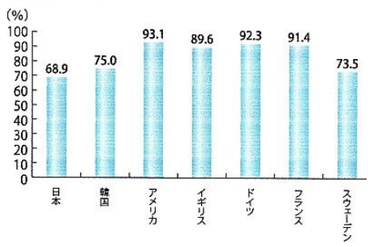
日本を含めた 7 か国の満 13～29 歳を対象とした意識調査（平成 25 年度版　内閣府子ども・若者白書参照）において、日本の若者は諸外国と比較すると自己を肯定的にとらえている割合は低く、うまくいくかわからないことに対して意欲的に取り組むという意志が弱い。実際、子どもたちと活動していても「めんどくさい」「疲れる」「つまらない」などの言葉を聞くことがある。インターネットやテレビなどによって溢れるほどの情報はあり、社会への関心がないわけではないが、社会参加への意識は低く自分のこととしてとらえることが困難なようである。子ども自身がやってみたいことを実現できる場があり、達成感を重ねることで、自分に自信を持ち、子どもが本来持っているはずの探求心、好奇心、想像力、創造力などが引き出されれば、おのずと主体的な行動につながり、社会に活気を与える存在になるであろう。

図表 1　自分自身に満足している



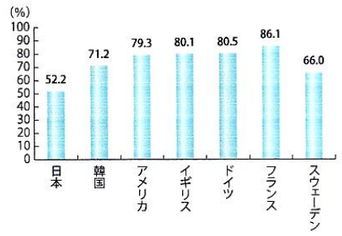
(注)「次のことがらがあなた自身にどのくらいあてはまりますか。」との問いに対し、「私は、自分自身に満足している」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した者の合計。

図表 2　自分には長所がある



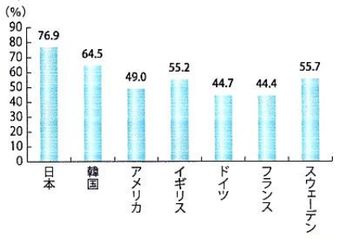
(注)「次のことがらがあなた自身にどのくらいあてはまりますか。」との問いに対し、「自分には長所があると感じている」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した者の合計。

図表 3　うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む



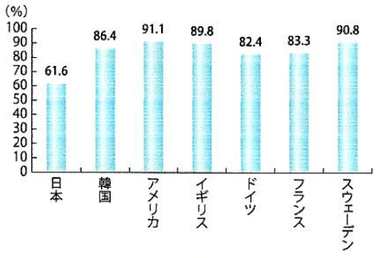
(注)「次のことがらがあなた自身にどのくらいあてはまりますか。」との問いに対し、「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した者の合計。

図表 4　つまらない，やる気が出ないと感じたこと



(注) この 1 週間の心の状態について「次のような気分やことがらに関して，あてはまるものをそれぞれ 1 つ選んでください。」との問いに対し，「つまらない，やる気がでないと感じたこと」に「あった」「どちらかといえばあった」と回答した者の合計。

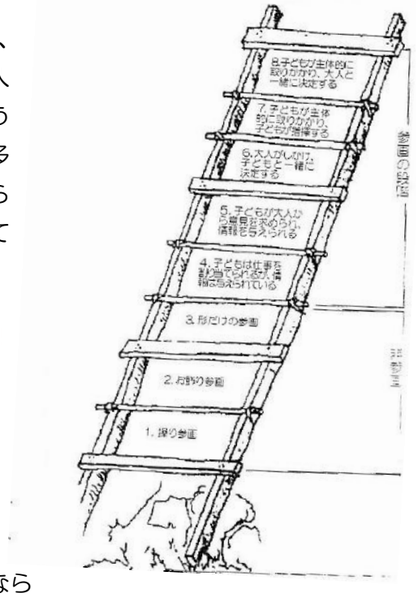
図表 8　将来への希望



(注)「あなたは，自分の将来について明るい希望を持っていますか。」との問いに対し，「希望がある」「どちらかといえば希望がある」と回答した者の合計。

参画のはじご

1997 年にイギリスで発行され、2000 年に IPA 日本支部によって翻訳されたロジャー・ハートの「子どもの参画」の中で、子どもの参加の段階を梯子で表したものがある。梯子は８段あり上段に行くほど子どもが主体的に関わる程度が大きいことを表しているが、こども NPO では、どのような参加の仕方が参画なのか、なぜ参画することが必要なのか、参加と参画は何が違うのか、といったテーマについて議論を重ねてきた。その中で、こどもの参画が進むと社会はどうかわるのかという投げかけに多くの参加者は、「子どもがエンパワーされ、持っている力を発揮することができれば、大人とは違う新しい発想で社会を活性化させ、明るい未来を築いていく」というような答えにたどり着いた。子どもが参画する社会は、子どもだけでなく多くの人々にとってやさしい社会になるだろう。子どもが子どもに関わるあらゆる場面に参画できるよう、私たち大人は子どもを対等なパートナーとして一緒に考え意思決定を進めていくことが必要ではないだろうか。



子どもの参画の事例

事例１「子どもの虐待防止世界会議におけるユースフォーラム」

2014 年 9 月「子ども虐待防止世界会議」が名古屋市で開催された。会議に先立ち、人権・居場所作り・非行防止・虐待防止活動に取り組むユースたち(主に中学生・高校生)が実行委員会を結成し、ユースフォーラムを企画・実施した。開催の 1 年前から会議を重ね、どのようなフォーラムにしたいか、何を大人に伝えたいのかを議論し、試行錯誤しながらもユースならではの活気あるフォーラムをつくりあげた。ここに実行委員として関わった高校生の感想の一部を紹介したい。

「虐待は世界共通のことであって、世界の大人に発信していかなくてはいけない。そして、子どもも大人も虐待という社会問題にしっかりと向き合っていかなければいけないと思った。子どもにだってできることがある。大人もそれぞれ気持ちや考えがあるように、子どもにだってそれぞれの気持ちや発想がある。このことを忘れないでほしい。」

このフォーラムに参画したことで子どもたちは、今起きている問題を自分のこととしてとらえ、どうしたら解決できるかを考えた。このような場を経験することで子どもは社会の一員としてできることがあると自覚し、主体的な大人へと成長していく。

事例２「子どもがつくる子どものまち」

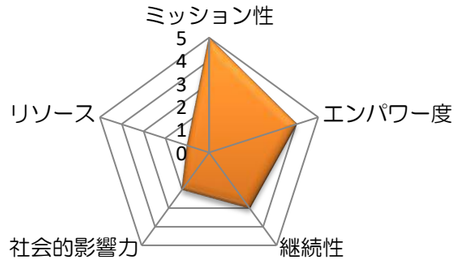
「子どものまち」は、その名の通り子どもがつくる町である。町には役場、銀行、ハローワーク、ゲームセンター、食べ物屋、手作りの品物を売る店などがある。子どもたちは町で働き、その町の通貨を稼ぎ、稼いだお金で買い物をしたり遊んだりする。また、市民として町に税金を納める。こども NPO は２００３年から毎年「ピンポン横丁」という子どものまちを開催してきた。一軒屋で開催する小さな町だが、企画から当日の進行まですべてを子どもたちが行う事業である。最初のころは、かなり大人がサポートしていたが年を経るごとに大人が手を貸さなくてもやれるようになっていき、時期が来ると子どものほうからそろそろ会議をしなくてはいけないと言ってくるまでになった。特に２００６年にできた子ども活動グループ MFP（ミックスフルーポンズ）のメンバーは、ピンポン横丁の中心メンバーとして事業をつくる以外にも、子ども会議のファシリテーターやフォーラムでのプレゼンテーションなどいろいろなことに挑戦し、しかもほとんど大人の手を借りることもなく、自分たちの力でやり遂げた。そのことは、子どもに関わる大人がどうあるべきか、子どもの力を信じて待つことの大切さを実感するものであった。

子どもの社会参画事業部門①

子どもの権利条約学習会

目的

・子どもの権利条約の普及啓発を行う。
・子どもの権利条約を通した愛知のネットワークをつくる。



評価の指針

ミッション性：団体のミッションに直結しているか。
エンパワー度：参加する人々をエンパワーしているか。
継続性：継続して取り組んでいるか。継続できそうか。
社会的影響力：社会に影響を与えているか。
リソース：資金や支援者は十分か。

1 月 24 日（土）に子どもの権利条約 in あいちパートナーシップ事業として「国連子どもの権利条約を読む」と題した学習会を実施した。講師に、江戸川子どもおんぶずの青木沙織さんと津田利華さんを迎え、子どもの権利条約の中から、今回は第 12 条、第 5 条に照準を合わせ、条文をしっかりと読むことで子どもの権利への理解を深めた。

国連子どもの権利条約は、元々、英文で書かれた文言であり、和訳にすることにより非常に難解な文章になっている。条文の文言を区切りながら丁寧に読むことと、制定にいたった各国の背景や経緯が分かる資料を基にした解説により、理解を深めることができた。子どもの権利条約に馴染みがない参加者にとっては少し難しい内容ではあったが、関心を持つきっかけにはなり、貴重な学びの場となった。

今後は、より多くの人々に子どもの権利条約の存在を伝え、学び合うためのネットワークが必要である。また、子どもと共に考える機会も不可欠である。

参加者の声

・条文がつくられた議論のプロセスを知ることができておもしろかった。
・子どもの権利条約は、子どもを大切にする気持ちでつくられている！あったかい！！
・いろんな価値観、子ども観がある中で条約を作ることはとても大変だったと知った。

子どもの参画促進研修
～児童館・子どもの遊び場における子どもの参画～

目的

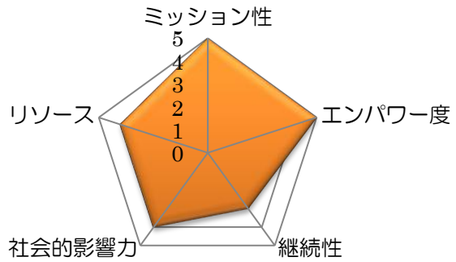
子どもの参画活動の評価の視点を設定し、成果を図り、活動を常に改善することで社会的責任・社会的理解向上を図ることを目指す。

本法人が運営する児童館において、人づくり・環境づくり・活動づくりなど多様な観点から事業の評価シートを作成し、このシートを用いて評価を行った。また、実践者の経験談を聴いて参画活動のヒントを得た。さらに、事業の改善や新たな事業の可能性を見出し、子どもの参画実践の可能性を検討した。

ちいさなちいさな地球の学校

目的

・子どもたちが地球にやさしい行動計画を立て、実行する。
・主体的に持続可能な社会をつくる力を養う。



小学校高学年対象。第 1 回目の話し合いで、今年の活動テーマを地球にやさしいキャンプと決め、企画を作り、準備を行い、参加者を募集して、夏休みに実行した。

今回のメンバーは、町でのテント泊は経験があるが、荷物を自分たちで担いでキャンプ場へ行ったのは初めてであった。自然豊かな国定公園内での焚火料理では自然との共生を感じた。9 月からは活動できるメンバーが減少して活動は休止することとなったが、年度初めにメンバーを登録制にして、話し合いを子どもたちで回し、目標を実行することができた。

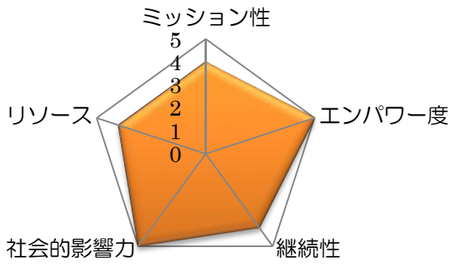
参加者の声

・学校や家ではできないことをすることができ楽しかった。
・子どもでもやれることが沢山ある、工夫すればやれないことはないと思った。
・苦労も力を合わせてやり遂げると気持ちがいい。
・自然の力は人間を超えていると感じた。

こどもアート☆コミュニケーション

目的

・子どもたちが自分の手やからだやこころを動かしながら、創造的な表現活動を通して、様々なものや人とコミュニケーションをとり、自分らしく生きる感覚を身につける。
・自分の手でつくりだす喜びや「うれしい」「楽しい」「好き」という気持ちから、生きる力を育む。



子どもゆめ基金の助成事業。アート作家からモチーフの刺激を受けて、子どもたちが感じたことや考えたことを、素材を自由に使って自分だけのオリジナル作品を作り交流した。講師は名古屋周辺を拠点に活動しているフリーのアート作家の方々に 3 回ずつお願いした。

子どもが自分のアイデアを生かして自分でつくることができた。自分らしい表現を探り、時間をかけて納得しながらオリジナル作品を完成させて、見せ合い、充実感を味わっていた。

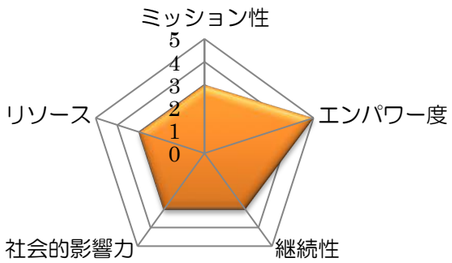
陶土ねんどの素材	ダンボールの素材	タイルの素材
すずきめぐみさん （kibaco 工房コトリ）	村田祐一郎さん （図画工作むらた）	大平伸二さん （Harp HOMEMADE）
「オリジナルボタン」 「わたしの神様」 「イロイロ箸置き」	「スマートボール」 「コロコロタワー」 「あそべるおうち」	「お花を飾るミニハウス」 「タイルで描くなべしき」 「わたしのドアプレート」

子どもの社会参画事業部門②

エンジョイ！のらキッズ☆オーガニック田んぼ！

目的

- 米が水田でどのようにつくられているかを知らない小学生を対象に、無農薬有機栽培の水田で田植えから稲刈りまでの継続した米づくりの体験活動を実施する。畑で芋や野菜の栽培も行う。
- 除草剤を使わず人の手で栽培する際の苦労や意義を学び、水田の生物の共生や収穫の喜びを知ることで生きる力を育む。



5月17日（土）	田んぼの泥を体感＆春の野良あそび
6月7日（土）	自分の手で田植えをしよう＆畑で芋を育てよう
7月26日（土）	田の草取り＆田んぼの生き物探し
9月6日（土）	案山子をつくって稲の穂を守ろう
10月4日（土）	鎌で稲を刈ってはざかけをしよう

なごや環境大学の助成事業。初めての田んぼ体験で、最初は泥に触れることに違和感を覚えていた子どもたちが、慣れるに従い主体的に活発に活動するようになっていった。昼には、野辺で焚き火をしたり、採りたての野菜を味わうなど、自然豊かな環境の中で自由に力を出して一日過ごす姿が印象的であった。保護者の方々や地域の市民団体の協力を得て、都会暮らしの子どもたちに農業体験の場を作ることができた。

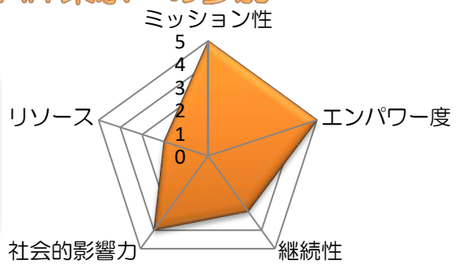
参加者の声

- 弱そうな苗で大きくなるのかなと心配した。
- イネとヒエは似ているけど、ヒエの方が強かった。
- アメンボはどうして冷たい水でも平気なんだろう。
- 黄色になって枯れていると思ったらお米があって驚いた。
- おたまじゃくしがいなくなるので薬は使いたくない。
- はだしが気持ちよかった。

子どもの権利条約フォーラム2014 in 東京への参加

目的

- 子どもたち自身が子どもの社会参画の柱である国連子どもの権利条約について学ぶ。
- 子どもたちが他団体の子どもたちとの意見交換を通して考えを深め、自らの活動に生かす。



「子どもの権利条約フォーラム」は、子どもの権利条約ネットワークが現地実行委員会と共に毎年開催しているフォーラムである。こどもＮＰＯは2012年に愛知県で「子どもの権利条約フォーラムin あいち」を開催してから毎年参加している。

このようなフォーラムに参加することは子どもの自信につながり、自己尊重感を高め、様々な社会的課題に関心を持つきっかけとなる。しかし、現在はこのようなフォーラムに参加するための旅費等は子どもの自己負担となっており、参加促進のための資金作りが必要である。

子ども・ユース向け企画

グループに分かれて、学校・家・塾・習い事など、子どもたちが身近で体験した嬉しかったこと・嫌だったこと・困ったことなどを出し合った。その後、子どもの権利条約をわかりやすく学び、身近な生活と子どもの権利のつながりについて考えた。また、この条約を多くの人に知ってもらうにはどうしたらいいかアイデアを出し合った。

おとな向け企画

様々な視点から子どもの権利に関わっている方々を迎え、分野ごとの状況や課題を報告していただくと共に、「子どもの最善の利益」をテーマに今後の権利保障に向けて分野横断的に検討した。

特別企画

元子ども兵士ミシェルさんの講演会

子ども・ユース・おとなプログラム

グループに分かれて「10年後の日本社会がどのようになっていてほしいか」「そのために今後1年で何ができるのか」を考え、来年のフォーラムへの展望を共有した。

ちびっこ親子のたまり場

目的

- 子どもの自由な遊び場を保証する。
- 育児の当事者が地域ぐるみで互いに助け合える関係づくりのサポートをする。
- 子どもにとっての「遊び」の重要性を理解し、子どもを見守ることのできるおとなを増やす。

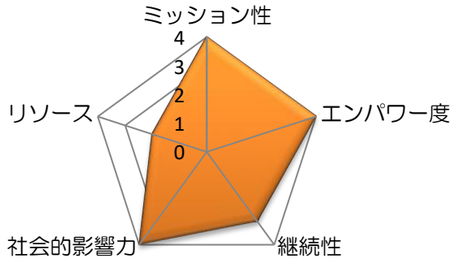
遊具のない土地で水や泥場を活用して大胆に遊んだり、近くの森などに探検に出掛けたり、子どもが心から「こうしたい！」と思うことを大事にしながら、子どもの遊びを大人はそばで見守った。地域ぐるみで子育ての出来る関係づくりをサポートした。参加している子どもの保護者で当番を決め、交代でスープなどをつくりみんなで一緒に食べた。自由な時間・空間・仲間の中で、子どもは遊びを通して意欲や集中力などを身につけていった。子どもが変化していくことで保護者も変化し「遊び」の重要性を理解した。参加者からは「親も子も自由になれました。」といった感想があった。

子どもの社会参画事業部門③

Teens' Café

目的

・中高生の社会参画を促進するために、中高生の居場所と参画の機会をつくる。



Teens' Café zero

・2014 年度の Teens' Café についての話し合い

Teens' Café 【毎月 1 回開催】

・進学を祝う会　・戦争の話を聞いて考えよう
・クリスマス会　・バレンタインケーキ作り　など

Teens' Café プラス

・高校生による小学生対象イベントの開催
・東北子どもまちづくりサミット報告会への参加
・子ども虐待防止世界会議ユースフォーラムへの参加
・全国こども福祉センターとの交流（バドミントンに参加）

名古屋市社会福祉協議会の助成事業。中高生の居場所として機能させ、困った時に相談できる保護者以外のおとなと信頼関係を築けるような場とした。また、中高生同士のコミュニケーションも大切にし、社会参画につながるようなチャレンジができるよう働きかけた。様々な背景を持つ子どもたちが一緒に食事をつくったり他愛もない話をすることで、学校や家庭以外の居場所を確保することができる。また、一緒に時間を過ごす中でスタッフとの信頼関係も築くことができ、外部のフォーラムやサミットなどに参加する機会を提供できた。このような社会参画の機会があることで、子どもたちは社会の現状に対して自分の意見を述べることに慣れ、大きく成長した。

にっしん子ども防災マップ探検隊

目的

日進市の子ども達がまち探検とマップ作りを行い、活動発表を行うことで、万が一地震が起きたときに、まちの中でどのような危険が起こりうるか、どうすれば身を守ることができるかを体験的に学び、具体的にとるべき行動を考え、大人の指示や判断が得られなくても子ども自身が主体的に動くことができるようになることを目的とした。

参加者の声

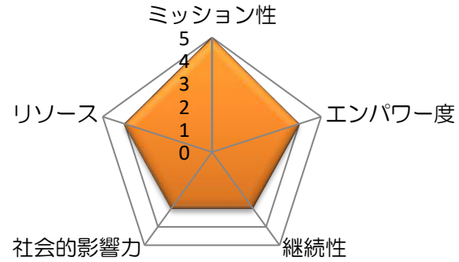
・今まで何も考えずに歩いていたが、意外に自分の知らない危険な場所がいっぱいあり驚いた。
・作ったマップを見て、災害時にどういうルートを移動すればいいのか実際にやってみてほしい。

日進市からの委託事業として実施した。日進市の全小学校の高学年を対象に参加者を募集した。事前説明会を経て、まち探検をおこない、災害が起きたときに役立つ場所や危ない場所などを調べ、防災マップを作成し、更に学区のマップも作成した。最後に参加者全員が一堂に集まり、市民に向けて学んだことを伝え、発表した。子どもを中心に地域が一体となった防災教育・安全なまちづくりへの意識を高めることができた。

学校に行かない，行けない子どもの居場所づくり事業 LARGO
大清水居場所づくり事業　子どもとつくるくらし☆あそび☆まなびの場 Roots

目的

・緑区において不登校の子どもが通える地域の居場所がない現状を鑑み、子どもの学ぶ権利を保障するために地域での受け皿をつくる。



LARGO	地域の子どもの放課後の居場所「ピンポンハウス」の休館日（火曜日）を活用して、月に２～３回学校に行っていない子どもの居場所を開催した。名フィル子どものエール基金の助成事業として実施した。
Roots	（財）ペガサス財団の助成を受け、LARGO の活動を拡充し、開催日を週 4 日に増やした。

『H25 年度名古屋市不登校対策基本構想』によると、名古屋市では小学生 456 人・中学生 1,395 人が不登校となっている。緑区の長期欠席者（年間 30 日を超える欠席者）は小学生で 96 人、中学生では 204 人である。緑区役所徳重支所では年 3 回の循環型の相談日が設けられているが、区内に受け皿がない状態であった。

LARGO では、不定期ではあるが月に 2～3 回の居場所を開催することによって、周辺区の小中学生の保護者から 14 件の問い合わせがあった。「親は行かせたいが子どもが家から出られない。」「子どもは行きたいが、学校に復帰できなくなるのではと不安で行かせられない。」「薬を飲んで昼夜逆転し、深刻になっている。」など当事者の声から実態が把握できた。定期的な利用は 2 名、不定期で 3 名の利用があった。区内の「不登校親の会」とのつながりができ、事業の紹介ができた。地域の方が将棋を教えに来てくれるようになり、こうした地域のボランティアが活動を支えてくれた。

6 月からスタートした LARGO では月に 2～3 回の居場所を開催したが、「行きたいと思った時に開催されていない。」との声が寄せられ、Roots の開催に至った。開催日を週 4 日にしたことで継続的な活動が可能となった。中学生の保護者 3 名、中学生 2 名、小学生 1 名の見学があったが、経済的な面での負担が大きく、利用につながらなかった。また、教育機関への PR に難航したため、今後は学校とのより良い関係づくりが課題である。また、居場所機能は担保できたが、地域の学び場としての方針・フレームづくり・教材づくりなどが課題である。LARGO・Roots 共に、スタッフとして相談員を配置し、保護者からの相談にも対応できる体制を整えた。2 月～3 月にはペガサス財団の助成を受けて事業をさらに拡充し、「不登校の子どもの居場所づくり事業」を実施した。人的資源の確保や教材・教具の充実、広報にも力を入れることができた。

参加者の声

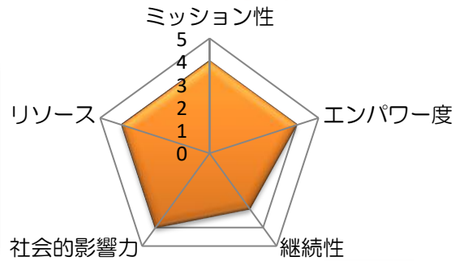
子どもひとり一人の気持ちに沿った関わりを大切にしていて、やってみたいことに挑戦できる場。日々の遊びや活動が学びにつながっている。

子どもの社会参画事業部門④

緑区子育て支援ネットワーク連絡会
子どもが育つ地域のつながりづくり事業コーディネート事業

目的

・子どもたちの豊かな遊び場をつくる。
・子育て中の親が一緒に子育てする仲間と出会う。
・世代を超えて地域の中で顔の見える関係やつながりをつくる。
・子育て中の親が地域で活躍する人や活動を知り、課題を発見し、共有しながら地域の事を自分事として考えることができるような意識を育む。



①子どもの遊び場プレーパークの開催（実践活動）
②講演会（学習活動）
③まちのおしゃべりカフェ（交流→課題共有→意識啓発）

緑区役所の委託事業として実施した。地域住民、子育ての当事者、子どもをはじめ、学区連協、子育て支援団体や支援者、NPO、学校などと協働し、子育てしやすい地域づくりと子どもたちが豊かに育つ地域づくりを目指した。2014 年度は大高南学区内の公園や公営住宅の敷地 3 か所を巡回し、月に 1 回のプレーパークを実施することで地域づくりを推進すると共に、子どもの遊びの価値を伝える講演会、子育ての当事者の交流会「まちのおしゃべりカフェ」を開催した。

これらの 3 つの事業を組み合わせ、地域力を高める取り組みを行った。プレーパークは年 12 回開催し、子ども 634 名、大人 301 名の参加があった。開催場所によって参加者層が異なり、新しい公園には転入してきた親子、特に父親と子どもの参加が多く、公営住宅の敷地内では外国籍の親子や子どもの参加が多かった。講演会には 61 名の参加があり、地縁組織で役割をもった地域の方や学校の先生など多様な立場の方の参加が見られた。おしゃべりカフェでは転入してきた親子の参加が目立ち、10 組の親子が日ごろの子育ての悩みや、地域で不安に思っていること、子どもが地域で育つための環境について話し合った。転入してきた親子は孤立しがちで育児の不安を抱え込む傾向にあり、みんなで子育てできる環境を望んでおり、その後のプレーパークへの参加にもつながった。公営住宅では、生活困窮の家庭環境で育つ子どもたちが抱える課題が表面化し、遊びを通じて自分らしさを表現できたり、関係づくりができる時間や場が日々の生活の中でも大変重要であることが見て取れた。

子どものまちサミット企画委員会
なごや☆子ども City2014

目的

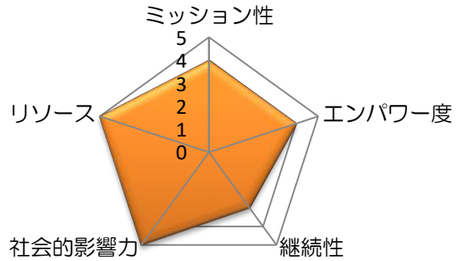
疑似的なまちでの遊びを通して子どもたちの創造する力や主体性を育む。

構成団体と一般公募の子どもたちから成る子ども実行委員会に、こどもＮＰＯの子どもたちも参加した。子どもたちはまちの仕組みやデザインなどについて話し合い、11 月 2 日（日）・3 日（月）に日本ガイシホールで子どものまちサミット企画委員会主催のなごや☆子ども City2014 が開催された。ＮＰＯ関係者や有識者が企画委員として子どもたちの主体的な活動をサポートした。

名古屋市緑児童館

目的

「遊びは『生きる力』ではない、生きている証だ！」をモットーに、子ども自身が主体となって活動できる機会をつくる。



参加者の声

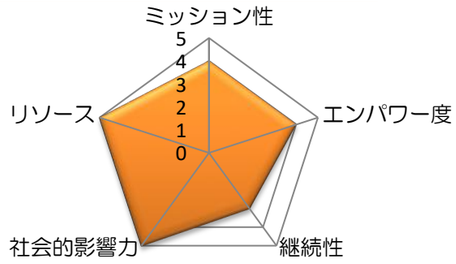
・やたら自由。…もう少しルール作っていいんじゃね？
・２４時間営業にしてよー。
・異年齢入り乱れて遊んでいるのが良い。（保護者）
・雨でもここなら誰かいると思った。そしてやっぱり居た！（プレーパーク参加者）

名古屋市子ども青少年局からの指定管理運営を実施している。子どもたちが本来持っている「やってみたい」という気持ちを引き出し、実現できるような事業を行っている。市内各区に一ヶ所ずつしかない児童館の重要な事業の１つに移動児童館があるが、当児童館は単に児童館外での活動を行うだけではなく、子どもたちが屋外で外遊び、冒険遊びをできる機会ととらえて「冒険遊び場・にいのみ池プレーパーク」「おてんとひろば」等のプログラムを展開している。屋内だけではなかなかカバーできない、子どもたちの大きなエネルギーの発散の場となっている。自由にとことん遊び込めるような環境作りを心がけることで、子どもたちは個人や集団で自分の意志のもと遊びながら、「挑戦、失敗、あきらめ、工夫」等を繰り返し日々自ら育っている。

名古屋市中川児童館

目的

人口 22 万人を超える中川区に一つしかない児童館として、中川区全体の子ども育成や子育て支援の中核となる。



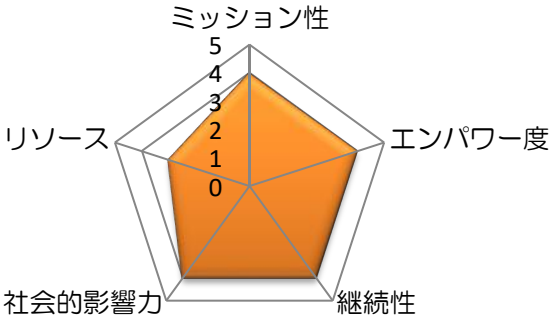
名古屋市子ども青少年局からの指定管理運営を実施している。子どもの社会参画の推進を進めるため、こども自らがやってみたいことを企画し実行できるよう、子ども企画システムを設けている。子どもたちの発信により仲間づくりが始まり、仲間たちとの試行錯誤の結果、具体的なプログラム案が確立し実施される。企画に対するいち参加者であった子どもが、自ら実行できる楽しみを肌で感じ、新たな挑戦へと繋げることができる。自己肯定感が低い子どもたちが少なくない現況の中、児童館が子ども企画を通して自己肯定感の形成の一翼を担うことが、子どもの社会参画の推進につながる。

子どもの最善の利益を保障する事業部門

名古屋市生活保護世帯の子どもの学習サポートモデル事業

目的

被保護世帯の中学生の高校進学率は一般家庭より低く、被保護世帯の子どもが大人になっても再び生活保護を受給してしまうという「貧困の連鎖」も指摘されている。そこで、被保護世帯の中学生に対し学習支援を実施し、基礎学力の向上を図り、高校進学を促進する。



名古屋市子ども青少年局の委託事業。家庭環境や学力面で高校進学に課題を抱える生活保護世帯の中学生（主に３年生）に対して無料の学習会を開催し、高校進学支援・保護者の養育支援・子どもの居場所づくりなどを総合的に実施する。緑区内で２箇所、各会場 10 名程度、週２回２時間の実施。

生活保護受給世帯の子どもたちにとって、学習環境を自助努力によって整えることは難しく、学ぶことを諦めて将来に対する夢や希望を失うこともある。子どもたちの状況を把握し、個々に合った学習サポートに取り組んできた結果、意欲・成績の向上につながった。6 人の卒業生は公立高校全日制（3 名）と夜間定時制（3 名）に進学した。一方で、変わりたいと思いながらもそのきっかけを掴みきれず模索中の子どももおり、長期的な関わりを持つ必要性がある。

子どもたちの抱える課題を克服するには、学習支援の現場だけではなく、行政・地域・学校などとの連携や保護者への対応などが必要不可欠である。担当職員の人件費を委託費用だけで賄うことは厳しく、財源の確保が課題である。

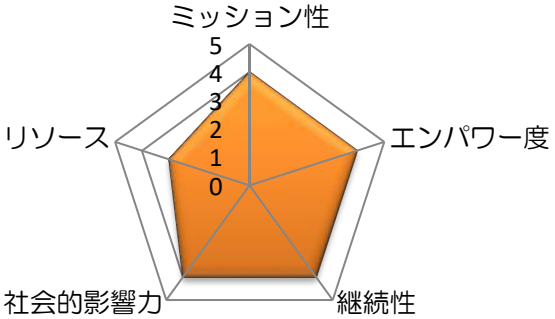
参加者の声

- ここだからがんばろうと思えるんだ。
- わかるまで何回も何回も教えてくれてうれしかったし、勉強が少しだけど好きになれた。

名古屋市ひとり親家庭の子どもへの学習サポートモデル事業

目的

小学校から中学校へ進学し、学習内容が変化する中学１年生を対象に、定期的に学習支援を行うことにより、学習に対する意欲の低下を防止し、家庭における学習に積極的に取り組めるよう支援を行う。



名古屋市子ども青少年局の委託事業。子どもの教育に関心の高い保護者がいる反面、子育てに関する悩み、長時間労働、仕事の掛け持ちなど、保護者もまた余裕のない中で仕事と子育ての両立をしていることが伝わってきた。学習中心の事業ではあるものの、保護者に対する助言や相談体制等、家庭支援の必要性がある。また、習熟度には個人差があるため、子ども 3 人に対して 1 人の学習サポーターでの体制や、週 1 回の学習会実施で課題克服することは困難だった。

調査研究及び政策提言事業部門

こどもNPO学び場づくり×NIED平和を創りだす学校づくりプロジェクト

目的

こども NPO と NIED 国際理解教育センターの経験知を融合させ、自立と共生を支え合い平和を創りだすための「学び場・学校」を構想し、実現に向けて必要なものを探る。

理想の学校のビジョン
１自己選択・自己決定ができる学校
２自己表現、自己肯定感が育まれる学校
３社会で共に生き、役立ち合える学校
４地域・社会と共にある学校
５自然とともにいのちが実感できる学校
６個性や多様性を大切にする学校
７自分たちで創る学校
８子どもの権利を大切にする学校
９子どもと大人が対等に学び合う学校
10 座学と実体験が調和した学校

NIED 国際理解教育センターとの協働事業。「子どもの社会参画」を進めるためには、放課後・休日を豊かにする活動に留まらず、「遊ぶ＋暮らす＋学ぶ＝学校づくり」を目指したいと考え、平和を創り出す機能を持った学校づくりを構想していた NIED と共にビジョンを描くことができた。今年度は春にプロジェクトチーム設立記念イベントを開催し東海地域の関係者とのネットーワークを広げ、夏は国内外のオルタナティブスクールの調査・研究をまとめ、秋には実際に関西の学校へ見学ツアーを実施した。今後は、こども NPO と NIED のメンバーを中心に任意団体を立ち上げ、両者の経験・知識・実績を生かし、学校づくり実現に向けて動いていく。また、学校設立（立地確保・スタッフ雇用）には膨大な費用がかかるため、その費用を継続的に捻出していくことが課題となる。

ＥＳＤ２０１４に向けての意見交換会への参加

目的

ESD に取り組む NPO・NGO・教員と共にそれぞれの実践や活動の成果から、学校・地域・家庭などあらゆる場で、あらゆる世代を対象にした「自己肯定感を育む環境づくり」を検討し、2015 年以降の ESD 実践の展開における重要な柱として発信する。

環境省中部環境パートナーシップオフィスのコーディネートのもとで意見交換会を行った。『これからの ESD 実践への提案　自己肯定感を育む環境をつくる』と題した提案書を作成し、11 月 12 日（水）に行われた ESD ユネスコ国際会議にて発信した。こども NPO では、子どもたちの日々の活動を通じて、提案書の提言を実践している。

ＩＳＰＣＡＮ子どもの虐待防止世界会議ユースフォーラム

目的

※P6 に事例報告あり。

子どもの虐待という問題に対して、ユースが集まって討議する。

NPO 法人 CAPNA をはじめ、複数の団体と協働し、企画・運営を行った。2013 年から月 1 回ユース実行委員会が開催され、こども NPO のユースも参加した。2014 年 9 月 13 日（土）に行われたユースフォーラムでは、プレゼンテーションや劇などの手法で意見表明をしたり、グループ等討議を行ったりした。

その他の事業部門

なごやつどいの広場ピンポンハウス

目的

「どの子も我が子」「地域ぐるみの子育ち支援」をモットーに、子どもの育ちを大切にし、子どもおとなも共に育ち合う場を目指す。

参加者の声

- 肩の力を抜いて子育てできる様になりました。
- 子育ての方針の基盤ができました。
- 沢山の育児仲間ができ、育児を楽しめる様になりました。
- 子育ての方針の基盤ができました。

名古屋市子ども青少年局の補助事業。「子どもが心身共に豊かに育つ」という理念の元でプログラムを行い、ブログ等でも発信してきた。その結果、乳幼児期に何を大切に子育てしていくべきか理解する参加者が増えてきた。参加者同士が子育てを取り巻く環境について本音で語り合う姿もあり、11 年間この事業を継続してきた成果があった。

一時預かりぴぽちゃんち

保護者の用事や病院通いなど、困った時に子どもを気軽に預けることが出来る仕組みをつくった。リフレッシュしたい母親の育児負担を減らすこともできた。慣れた場とスタッフの中で安心安全に子どもを預かった。

名古屋市職員ＮＰＯ派遣研修

NPO 組織の特性を理解し、市民との協働を基本とした幅広い視野と発想を身につけるための研修となっている。NPO やボランティア団体、市民とのより良い関係づくり、それぞれの特性を理解した上で、行政の役割や課題を見出すきっかけになっている。子どもの育つ環境や実態を知り、子どもは持続可能な社会を創る一人の市民として、力を持っていることを実感できる研修内容を組み立てている。

みどり赤ちゃんまつり０，１，２

緑区子育て支援ネットワーク連絡会主催。こども NPO も実行委員会に参加した。緑区の子育て支援関係機関が連携して取り組むイベントであり、情報発信、親子の交流、支援者のネットワーク強化などの目的を持って毎年実施している。

預かり保育ふたば

子育てに不安を抱える保護者、産後の母親などが子どもを預け離れる時間をもつ事により、余裕のある子育てができるようサポートした。固定メンバーの中で預かった子どもが安心して遊び、子ども同士の世界を大切にしながら感情豊かに育つ様に見守ることができた。

facebook，ウェブサイト，ブログ，機関紙等による広報活動

機関紙を年 4 回作成し、正会員・賛助会員・行政関係者・関連団体・地域の方々などに配布した（約 1,000 部）。日々の報告や参加者募集などは facebook やブログにアップし、活動の様子を発信している。ウェブサイトは、2015 年 8 月にリニューアルした。

http://www.kodomo-npo.or.jp

決算報告

経常収益	
受取会費	256,000
受取寄付金	5,861,855
受取助成金等	3,562,599
事業収益	70,129,767
その他収益	229,661
経常収益計	80,039,882

経常費用		
事業費	人件費	50,642,006
	その他経費	19,637,386
	事業費計	70,279,392
管理費	人件費	3,275,033
	その他経費	1,386,346
	管理費計	4,661,379
経常費用計		74,940,771
当期経常増減額		5,099,111

税引前当期正味財産増減額	5,099,111
法人税、住民税及び事業税	72,420
当期正味財産増減額	5,026,691
前期繰越正味財産額	3,765,475
次期繰越正味財産額	8,792,166

経常外収益 0　**経常外費用** 0

子どもも、おとなも、未来を一緒につくる。
こどもNPOを応援してください。

✧ **クリックで応援する**　gooddo　http://gooddo.jp/gd/group/kodomonpo/

gooddo は社会貢献を身近にするプラットフォームです。クリックすることで、誰でも今すぐに無料で NPO・NGO を支援できます。

✧ **ボランティアをする**

こどもNPOの活動は様々な人に支えられています。「活動拠点や講座、イベントのスタッフとして活動する」「生活困窮世帯の子どもたちの学習支援をする」「活動写真をとる」「豊かな庭と畑の手入れ」「機関紙の編集や印刷・発送をする」など興味・関心事、得意な事、ご都合に合わせて、あなたのやりたいことでご協力ください。

✧ **会員になる**　会費：5,000 円/年

会員は総会の構成員となり、議決権を持ち、定款で決められた重要な事項の決定に関わることができます。年 4 回の会報をお届けし、会員間の情報交流メーリングへ登録できます。

✧ **賛助会員になる**　賛助会費：個人 1 口 3,000 円/年，団体 1 口 5,000 円/年

こどもNPOの趣旨や事業に賛同いただける場合、運営や活動には直接関わらなくても、賛助会員として応援いただけます。年 4 回の会報をお届けします。

✧ **寄付をする**　振込先：愛知銀行八事支店 普通預金 637590
特定非営利活動法人こどもNPO 理事石原信行

思い立ったときに、任意の金額を寄付していただけます。子どもの参画活動や運営に、効果的に活用させていただきます。事業指定など寄付の使用用途を特定することもできます。

特定非営利活動法人　こども NPO

〒458-0818 名古屋市緑区鳴海町字大清水 69-1116

TEL/FAX　052-848-7390

Email　office@kodomo-npo.or.jp

Website　http://www.kodomo-npo.or.jp/

facebook　https://www.facebook.com/kodomonpo.nagoya

Blog　http://blog.canpan.info/kodomonpo-blog

gooddo　http://gooddo.jp/gd/group/kodomonpo/

※gooddo は社会貢献を身近にするプラットフォームです。
誰でも今すぐに無料で NPO・NGO を支援できます。

2015年9月1日発行